様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２２７５

研究課題名（和文）国際社会福祉研究の可能性：インディジナス・ソーシャルワークの理論的研究

研究課題名（英文）International Social Work research perspective through the Fijian Case: The theoretical research on the Indigenous Social Work International Social Work Research

研究代表者
松尾　加奈（Matsuo, Kana）

淑徳大学・その他部局等・准教授

研究者番号：６０７２７４７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フィジー共和国を対象として西欧ルーツのソーシャルワーク専門職教育の伝播と、ソーシャルワーク教育を受けていない人々の支え合いによる活動について、南太平洋大学に保管されている文献や実践家、教育者へのヒアリング調査を実施、その異同を分析したものである。文献からアジア太平洋地域のソーシャルワーク教育のインディジナイゼイションの流れにあった1970年に独立したフィジーは、独立当初から人材育成としてソーシャルワーク・ワークショップを実施していた。ニュージーランドのソーシャルワーク教育の影響も大きい。またソーシャルワーク教育を受けていない人々の相互扶助活動も社会開発の一環で実施されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
オセアニア圏域ではオーストラリアやニュージーランドの社会福祉研究文献は多くあるが、フィジーは地域研究が盛んであるが社会福祉領域では文献が極端に少ない。本研究は日本国内の社会福祉研究領域で数少ない南太平洋のフィジー共和国のソーシャルワーク教育・実践の資料である。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the differences in the transmission of the Western-rooted Professional Social Work education in the Republic of Fiji, and the activities of people without social work education, such as supporting each other.
The research is based on literature stored at the University of the South Pacific and interviews with practitioners and educators. It found that there was much discussion on the indigenization of social work education in the whole Asia Pacific region when Fiji became independent in 1970. In the beginning, SPC and other international organizations conducted social work workshops as a human resource development program, and social work educators from Aotearoa, New Zealand, also significantly contributed to developing social work education in Fiji. On the other hand, mutual support activities for people without social work education have been implemented as part of social work practice.

研究分野：国際ソーシャルワーク(社会福祉)

キーワード：インディジナス・ソーシャルワーク　国際ソーシャルワーク　フィジー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アジア太平洋圏域の国々は、第二次世界大戦以降に宗主国から次々に独立した。新興国家形成時期には、西欧ルーツのソーシャルワーク専門職(Western-rooted Professional Social Work; WPSW)教育が伝播、実践された(*Internationalization & Indigenization of Social Work Education in Asia,* 2014)。しかし伝播先の国の事情や価値基盤は西欧（ヨーロッパ各国ならびにアメリカ）とは異なるため、WPSW 教育の内容と現実社会の摩擦を抱えつつ、専門職化を目指している状況が続いている(*Islamic Social Work Practice : Experiences of Muslim Activities in Asia,* 2016)。一方で、政治、経済、社会、物質、情報、人口など、社会に様々な変化をもたらしているグローバリゼイションの波は、ソーシャルワークにも影響を及ぼしている。もともと同じ文化的・民族的背景を共にする人々の枠組みで実施されていたソーシャルワークが、1980 年代以降、国境を超える人々が抱える生活課題への支援の枠組みも包含してきた。すなわちソーシャルワークの国際化(internationalization)が進んでいることが指摘されている(Lyons, 2016)。

2000 年以降、国際ソーシャルワーク学校連盟(IASSW)、国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)は、「ソーシャルワークの定義」(2004)（現在は改訂され「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義（Global Definition on Social Work Profession）」(2014)と称す)、「ソーシャルワークにおける価値観、原則宣言(Ethics in Social Work, Statement of Principles)」(2004)、「ソーシャルワーク教育のグローバル基準(Global Standards for Social Work Education and Training)」(2004)、「グローバル・アジェンダ(Global Agenda for Social Work and Social Development　第１回報告、以降第 3 回報告まで公開中)」(2014～)、という 4 つの文書を発表している。これらにより、ソーシャルワークの業務と教育について国際的な基準と合意がなされたと見られている。

日本のソーシャルワーク専門職教育、社会福祉士養成課程においては、グローバルな文書を取り上げ、職業としての専門性を向上させる努力を続けているが、あくまでも国際社会において規定されたことについて日本国内に伝播するにとどまっている。

一方で、仏教ソーシャルワークの作業定義では、専門職やプロフェションという言葉を使わず、僧服を纏った僧侶たちが実践する活動もソーシャルワークに含んでいる(2017)。また、フィジーでは「教育を受けていなくても社会のために働く人がソーシャルワーカーである」という語りも見られる（松尾,2010）。さらに J. Ravulo、T. Malfile'o、D. Yeates が編集した Pacific Social Work(Ravulo et al., 2019)で定義された「太平洋ソーシャルワーク」も、仏教同様にプロフェションや職業という言葉は使われていない。S. Ramacake は、フィジーのソーシャルワーク実践についてキリスト教の影響を受け入れつつ、共助に係るフィジー独自の価値観を示している(Ramacake, 2007)。WPSW 教育がアジアの人々の生活になじみにくい理由の一つに、宗教的価値基盤の違いだけではなく、生活全般とその背景、すなわち文化・民族・伝統など様々な変数が存在している点が挙げられるだろう。「ソーシャルワークとは専門職であり、国際的な教育基準を満たすべき」と限定している点において、専門職でないソーシャルワークの存在の議論は国際的に十分になされていない。専門職教育に依らず、人々の生活に深く根付いたソーシャルワークの活動（indigenous social work: 以下、「インディジナス・ソーシャルワーク」とする）は、ソーシャルワークを専門職だけに限定する WPSW の視点への批判と、ソーシャルワークそのものの可能性を広げることができるのではないか。インディジナスソーシャルワークの理論的研究は、国際ソーシャルワーク研究を遂行する手段であるとともにソーシャルワークの本質を問うものである。

２．本研究課題の申請時における当初の研究目的

2014 年に採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」では indigenous knowledge を重視し、日本定訳ではこれを「地域・民族固有の知」としている。上記の問いに基づき、本研究では定義で特に重視されている先住民の知と、その土地の人々の生活に深く根付いたインディジナス・ソーシャルワークが、伝播された WPSW 教育へ与える影響の一端を明らかにし、ソーシャルワークの定義を専門職に限る枠組みから拡張させる基礎資料

となすことを目的とする。フィジー共和国を対象とした理由として以下 4 点を挙げる。①南太平洋小島嶼国では経済的に安定しているが国際機関や先進国からの援助を受けている開発途上国の一つであること、②イギリス連邦の一員でありイギリス・ニュージーランド・オーストラリアの影響を強く受けていること、③キリスト教、ヒンズー教、イスラム教という宗教の多様性を持ち、原住民とインドからの入植者、周辺島嶼国からの移住者という複雑な人口構成をなしていること、④WPSW 教育カリキュラムを実施している南太平洋大学(University of South Pacific、以下 USP とする)のキャンパスが首都スバに設置されている。USP は、キリバス、トンガ、サモア、ツバルなど南太平洋の 12 の島嶼国政府が運営している公立の高等教育・研究機関で、その卒業生は政府や国際機関に就職したり、オーストラリアやニュージーランドに移住したりすることが多い。これらの理由からフィジー共和国は、西欧ソーシャルワークの現地化（indigenization）の動きも見えながら、異なるベクトルを持つインディジナス・ソーシャルワーク活動の事例を収集することが可能な特性を持っている。日本においては特に先行研究の少ない地域である南太平洋島嶼国のソーシャルワーク実践事例と教育カリキュラムの情報収集と分析は、応募者が目指す国際社会福祉（ソーシャルワーク）研究方法確立に必要な要素であるとともに、日本の社会福祉専門教育、世界のソーシャルワーク研究にも大きく貢献するものと考えている。

３．研究の方法：

本研究は研究期間を 3 年間と設定し、USP およびアジア国際ソーシャルワーク教育連盟（APASWE）の協力を得ながら以下の 3 項目の調査を実施する。①フィジーのソーシャルワーク実践活動に関する資料の収集。日本国内において南太平洋地域のソーシャルワーク研究は、オーストラリアとニュージーランドを別として先行研究がみられない。本研究では、APASWE の理事会資料にフィジーの名前が現れる 1990 年代から 2020 年までの期間を区切り、国際機関や NGO の支援により実施されたソーシャルワーク活動の報告書を収集する。②USP におけるソーシャルワーク教育カリキュラム・教材・実習教育に関するヒアリング調査の実施。フィジーには公立大学が 2 校あるが APASWE 会員校は USP のみである。そこで USP の教員の協力を得ながらソーシャルワーク教育カリキュラム、シラバス、教材、実習教育、進学率および卒業生の進路・就職先についてヒアリングし、西欧ソーシャルワーク教育の概要と現状を把握する(2020 年度)。NGO や宗教団体など専門教育に依らない活動との連携と西欧ソーシャルワーク教育の課題を分析する。③フィジー国内における NGO、政府系機関、宗教団体によるソーシャルワーク実践事例調査・分析。専門教育に依らないソーシャルワーク実践について、首都スバを拠点とする活動団体にヒアリングを実施する。フィジーには国際社会福祉協議会(ICSW)の支部、国際ソーシャルワーカー連盟のメンバーのほか、日本の JICA 事務所、国連機関や国際 NGO、キリスト教会系の活動などがあり、これらの本部は首都スバに集中している。本研究ではスバで生活困窮者や社会的弱者への支援を展開する団体にヒアリングを実施する。以上の調査からソーシャルワーク教育を受けていない人々の支え合いによるインディジナス・ソーシャルワーク活動事例を収集し、WPSW 教育に拠った伝播・現地化したソーシャルワーク（indigenized social work）との異同と効果を分析、研究成果を発表する。

オーストラリア、ニュージーランドやカナダをはじめ海外においてはインディジナス・ソーシャルワークに関する先行研究が数多く見られるが、日本における同概念に基づく研究は未着手である。本研究を通じ、ソーシャルワークの定義を「専門職」の枠組みから拡張する基礎資料となし、日本語の先行研究がほとんどないフィジーのソーシャルワーク実践と教育の資料を収集し日本の国際ソーシャルワーク研究に寄与することを目指す。

４．研究の成果

本研究は開始直前から広がったコロナ禍により当初、また、予定していた USP 教員がオーストラリアに移住したこと、後任教員の博士論文テーマが本研究テーマと同じインディジナス・ソーシャルワークであったこと、フィジー共和国の政治体制の変化に伴い現地協力者との調整が難航したことなど、研究計画の数々の変更を余儀なくされてしまった。しかし日本人のオセアニア地域研究者や JICA が研究に協力を快諾していただいたことによ

り、１年延長し、４年間で終了することができた。

渡航できなかった期間の研究活動は以下のとおりである。

2020 年度は、所属するアジア国際社会福祉研究所が毎年実施している国際学術フォーラムの企画において、インディジナス・ソーシャルワークを問うテーマを提案、フォーラム運営の中心的役割を担った。コロナ禍により学術フォーラムの開催方法がオンラインに切り替わり、２４時間リレー形式でオセアニア、ASEAN、アフリカ、北米圏域の研究者たちを繋ぐフォーラムを企画と運営について各国の研究者と協力しながら準備を進め、報告した。学術フォーラムでは、オセアニア圏域の研究者にインディジナス・ソーシャルワークをテーマに発表を依頼し、参加者との共有を図った。2021 年度は、所属するアジア国際社会福祉研究所によるアジア 4 カ国（タイ、ブータン、スリランカ、ベトナム）の仏教ソーシャルワーク研究ネットワークの研究者たちとの共同研究「”Social Work Needs” and Service Providers: To whom people seek for help when no social workers (”ソーシャルワークが必要な時“とサービス提供者：人々は誰に支援を求めるのか？)」の研究報告会と第６回国際学術フォーラム「What Is the International Social Work with the Globalized States-Social Work?」の企画・運営の中核を担った。コロナ禍という想定外の状況下で、ICT を使い、オンラインでの研究成果発表、ワークショップや執筆などを進めることができた。これらのインディジナスな事例、現地化（インディジナイゼーション）の事例の検討は、本研究テーマを補完する役割を持った。

2022 年度以降の研究活動は以下のとおりである。

フィジー渡航ができるようになった 2022 年 11 月にスバ市でローカル NGO「エンパワー・パシフィック」のソーシャルワーカーと南太平洋大学(USP)教員と面会し、最終年度のヒアリング計画の準備を始めた。また、USP 図書館に所蔵されているコレクションでフィジーのソーシャルワーク教育発足に向け開催していた研修の記録について文献調査を行った。最終年度である 2023 年 9 月には、研究協力者としてオセアニア研究（地方自治）専門家の大阪学院大学鴻巣玲子教授を招聘し、フィジー共和国スバ市とラウトカ市を訪問、JICA フィジー事務所、国営高齢者ケア施設「ゴールデン・エイジ・サマンブラ」、ローカル NGO「パシフィック・リサイクル・ファウンデーション(RPF)」のヒアリング、ソーシャルワーク系のローカル NGO「エンパワー・パシフィック」でのワークショップを開催した。また、11 月にフィリピン・セブで開催されたアジア太平洋地域ソーシャルワーク会議(IFSW(AP)/APASWE 共催）で、「How the international social work research can serve social work education in the Asia-Pacific Region?」と題して口頭発表を行った。

国際社会福祉（ソーシャルワーク）研究の可能性として、インディジナス・ソーシャルワークとは何かを探求した本研究において、フィジー共和国のインディジナス・ソーシャルワークにいくつかの形があることが示唆された。フィジー共和国は、人々が長い歴史の中で国境を意識せずに海を渡って往来した歴史と、イギリスの植民地となった歴史を持っている。フィジー共和国は、期間労働者としてインドから渡来した人々がインド系フィジアンとして生活しており、その人口はフィジアン系フィジアン「イタイケイ」(i-Taukei)と拮抗している(島岡, 1989)。インド系フィジアンとイタイケイでは、異なるソーシャルワークニーズがあり、言い換えればそれぞれのインディジナス・ソーシャルワークが存在することが示唆された（株式会社国際開発センター、株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング, 2021)。

1970 年に独立したフィジーは新興独立国家形成と社会開発を目的に、国際機関がイニシアチブを持って人材育成が始まった。西欧ルーツの専門職ソーシャルワーク教育は政府担当者の自発的な勉強会から関心が広がり、広域公立大学である USP に School of Social Work が開設された(Desai, 1971)。また、ニュージーランド(ANZ)出身の APASWE 理事が南太平洋大学教員や実践家と共同プロジェクトを実施していた期間は様々な報告書や資料が残されていた(Bosmann-Watene et al., 2005; Kuruleca, 2005; Ramacake, 2007)。しかし、プロジェクトが終わると大学に保管される資料点数も大きく減少していた。

本研究を進める中で、インディジナス・ソーシャルワークで語られる「インディジナス」が、WPSW の視点であり、国連が先住民(Indigenous People)と定義する視点であること、そして仏教ソーシャルワークで語られてい

る「インディジナス」とは大きく異なることがわかった。仏教ソーシャルワーク研究が前提としているインディジナスは、「２０００年前から存在している仏教が行なってきたソーシャルワークの機能を持つ『専門職によらないソーシャルワーク』＝インディジナス・ソーシャルワーク」である。(郷堀 et al., 2018)両者は「土地・民族固有の」という点において似ているが、「植民地下で抑圧された人々」という限定がかけられているという点で大きく異なる(Bhangyi, 2024)。多民族・多宗教の国で国民の多くが仏教を信じている場合、国内の少数民族に対しても、仏教ソーシャルワーク実践をインディジナス・ソーシャルワークと言えるだろうか。この点において、インディジナスを捉える視点はどこにあるかという議論は重要だろう。

本研究は、日本の社会福祉学研究の中で数少ないフィジー共和国のソーシャルワーク教育の萌芽期とインディジナス・ソーシャルワーク、現状について文献調査、ヒアリングをもとに遂行した貴重な記録である。4 年間の本研究成果については、2024 年度に開催される社会福祉学会等での口頭発表と記録としてまとめるべく論文執筆を進めている。

今回はコロナ禍と政治情勢の変化に伴う協力者確保の限界という制約があったものの、研究を通じて交流した現地の人々との新しいネットワークを作ることができた。この貴重な人脈を活かしながら今後もフィジー共和国のソーシャルワーク研究を継続していく予定である。

参考文献

Bhangyi, V. B. (2024). Indigenous social work with older persons: An international perspective. *International Social Work*, *67*(2), 411-422. https://doi.org/10.1177/00208728221149567

Bosmann-Watene, G., Selby, R., & Kuruleca, S. (2005). Editorial. *The Fiji Social Workers Journal*, *(1),1*, i-ii.

Desai, M. M. (1971). *Report on the first for-week sub-regional South Pacific Course for Social Welfare and Community Work at S.P.C. Community Education Training Center, Suva, FIJI*. (unpublished).

Internationalization & Indigenization of Social Work Education in Asia. (2014). Social Work Research Institute Asian Center for Welfare in Society (ACWelS), Japan College of Social Work.

Islamic Social Work Practice : Experiences of Muslim Activities in Asia. (2016). (978-4-905491-08-8).

Kuruleca, S. (2005). Returning home: making sense of social work in Fiji. *The Fiji Social Workers Journal*, *(1),1*, 1-5.

Lyons, K. (2016). *International social work: Themes and perspectives*. Routledge.

Ramacake, S. (2007). Fijian Social Work Practice. *Aotearoa New Zealand Social Work*, *4*(22). https://www.researchgate.net/publication/310734431_Fijian_social_work_practice/fulltext/5835a49a08ae004f74cc8546/310734431_Fijian_social_work_practice.pdf?origin=publication_detail

Ravulo, J., Malfile'o, T., & Yeates, D. B. (2019). *Pacific Social Work: navigating practice, policy and research*. Routledge.

株式会社国際開発センター、株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング. (2021). *国別障害関連情報フィジー共和国*. https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/1000044785.pdf

郷堀，ヨゼフ.，秋元，樹.，藤森，雄介.，長谷川，匡俊.，H.M.D.R.Herath(H.M.D.R.ヘラ)，石川，到覚.，Sangbo，K.，Sherpa（カルモ・サングボ・シェルパ），菊池，結.，Loan，N. H.，松尾，加奈.，& Onopas，S.（2018）. *西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ：仏教ソーシャルワークの探究* [From Western-rooted Professional Social Work to Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work] (Vol. 0). 学文社.

島岡，宏.（1989）. インド系移民. In 太平洋学会（Ed.），*太平洋諸島百科事典*（pp. 40-41）. 東京：原書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松尾加奈	４．巻 2
２．論文標題 国際ソーシャルワーク情報：国際シンポジウム「戦争とソーシャルワーク」報告～グローバライズする社会でのグローカルなソーシャルワーク実践を考える～	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ソーシャルワーク研究	６．最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松尾,加奈	４．巻 5
２．論文標題 ブータン、ミャンマー、ネパールにおける仏教ソーシャルワーク実践	５．発行年 2021年
３．雑誌名 2020年度淑徳大学アジア国際社会福祉研究所アジア仏教社会福祉学術交流センター年報第５号	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takashi Fujioka, Viktor Virag, Kana Matsuo	４．巻 14-6
２．論文標題 Japan in Face of the COVID-19 Pandemic: Issues and Concerns for Social Work	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of Innovation, Creativity and Change	６．最初と最後の頁 196-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 松尾加奈	４．巻 4
２．論文標題 国際ソーシャルワーク研究の可能性～イスラム教とソーシャルワーク～	５．発行年 2020年
３．雑誌名 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所年報	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松尾加奈	４．巻 25
２．論文標題 国際ソーシャルワーク研究の新しいパラダイムに向けて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 淑徳大学2020年度総合福祉研究	６．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Matsuo, Kana
２．発表標題 How to Activate the Discussion on the International Social Work in Japanese Social Work Education?
３．学会等名 2021年ソーシャルワーク教育・社会開発国際会議（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Gohori, Josef, Matsuo, Kana, Akimoto, Tatsuru, Fujimori, Yuusuke
２．発表標題 Exploring the Indigenous Practice: Buddhist Social Work
３．学会等名 第26回アジア太平洋ソーシャルワーク合同地域会議（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Matsuo, Kana
２．発表標題 What is the diffecence between international social work and social work conducted in globalized states?
３．学会等名 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所国際学術フォーラム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Matsuo, Kana
２．発表標題 Gender Equality -- Do you face gender inequality issues in daily life?--
３．学会等名 World Social Work Program 2022（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松尾加奈
２．発表標題 コロナ禍の国際ソーシャルワーク研究活動事例報告：アジア国際社会福祉研究所（ARIISW）の場合
３．学会等名 日本社会福祉学会第69回大会・留学生と国際比較研究のためのワークショップ』（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松尾加奈
２．発表標題 国際ソーシャルワーク研究の可能性－イスラム教ソーシャルワーク活動とソーシャルワーク教育カリキュラムの国際比較研究－
３．学会等名 日本社会福祉学会第68回秋季大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 郷堀　ヨゼフ、松尾　加奈	４．発行年 2023年
２．出版社 学文社　(GAKUBUNSHA)	５．総ページ数 132
３．書名 東南アジアにおける仏教とソーシャルワーク	

１．著者名	４．発行年
Kana Matsuo, Chun Bora, Keo Vichith, Hieu Van Ngo, Suon San, Bobby, U kyaw Sit Naing, Daw EiEi Phu, Sao Ohn Hseng, Koji Yamaguchi	2022年
２．出版社 Gakubunsha	５．総ページ数 97
３．書名 Research Book Series No. 8. Exploring Buddhist Social Work: Buddhism and Social Work in Cambodia and Myanmar	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Namae, Takayuki. Encyclopedia of Social Work.
https://oxfordre.com/socialwork/view/10.1093/acrefore/9780199975839.001.0001/acrefore-9780199975839-e-1604.
「国際ソーシャルワークを実践家の声から問う」　調査報告書発刊！
https://www.facebook.com/photo/?fbid=703099781613419&set=pb.100057402102361.-2207520000.&locale=ja_JP
研究叢書および報告書を発刊しました！(Kara No.52)
https://www.facebook.com/photo?fbid=726102819313115&set=pb.100057402102361.-2207520000.&locale=ja_JP
仏教ソーシャルワークの探求：ミャンマーとカンボジア
https://youtu.be/VvSMR8_jibc

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	鴻巣　玲子 (Konosu Reiko)	大阪学院大学・教授	２０２３年度フィジー共和国現地協力者ヒアリング調査の調整協力を依頼した。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
"Social Work" Needs and "Social Work" Providers Researh Project workshop	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関